

# まちづくり ひろしま

第37号 (平成30年9月15日)

読者数：631名 (募集中)

メール：[hirosima.idea.c@chugokuc.co.jp](mailto:hirosima.idea.c@chugokuc.co.jp)

〒733-0002 広島市西区楠木町1-9-7

発行人：前岡智之、編集人：瀧口信二

配信元：広島アイデアコンペ実行委員会

ご提案・ご意見等は、こちらまで

被爆100年(西暦2045年)の姿をめざして

## □ 巻頭言

### 多文化共生と平和都市の未来

広島大学名誉教授／建築史・意匠 杉本俊多



先日、シシリー島のパレルモを訪れる機会があった。イタリア半島の南端、アフリカとも交流のあった地中海舟運の港街である。紀元前からフェニキア、古代ギリシャ・ローマ、東方のビザンチン、アラブ・イスラム、そしてカトリックの文化が積み重なり、さらに北から来たノルマン人の王国が花咲き、様々の文化の痕跡が宮殿や教会堂、また街路構造に残る。その混沌はスペイン王朝下のバロック的都市デザインで統一感を付与されることとなった。

宗教的に寛容だった12世紀ノルマン王朝下のパレルモで育ち、翌世紀に神聖ローマ帝国の皇帝となるフリードリヒ二世は、ローマ教皇に急ぎ立てられて、いやいや十字軍を率いてエルサレムに進撃するものの、イスラム王朝と交渉し、戦わずにエルサレム返還を実現した。ドイツのシュタウフェン朝をルーツとしつつ、パレルモの混成文化に育ち、イスラム教徒とも直にアラビア語で交流した平和主義者は、保守的なローマ教皇に破門された異色の皇帝だった。皇帝は正八角形の城カステル・デル・モンテなど、独特の幾何学建築の文化を残しているが、そのふるまい方は多文化共生の方法にヒントを与えてくれる。



多様な様式の混成からなるパレルモ大聖堂

私はベルリンの都市・建築史を研究テーマにしてきたが、1989年に「ベルリンの壁」が崩壊した後、世界の建築家たちによって様々の建築スタイルが混じり合う光景に目を見張らされた。イギリス人建築家N. フォスターによる連邦議会議事堂、イタリア人建築家R. ピアノをマスターアーキテクトとするポツダム広場地区再開発を始めとして、統一ベルリンにはグローバルに資本が集中し、多数の外国人建築家たちがそれぞれのスタイルの建築物を手がけた。実はすでに壁に閉じ込められた西ベルリン時代にも、IBA (国際ベルリン建築展 1977-1984, 1987) が企画、開催されていて、世界から数百人規模で建築家が招かれ、集合住宅を建築していて、この状況はその発展形でもあった。実験なのか、現実なのか、境が見えないが、今、ベルリンは世界の先端的な建築スタイルの混成状態にある。

戦後ドイツではナチスのいわば「ドイツ・ファースト」政策への強い反省から、民族性を削除したニュートラルな合理主義を主流としてきたため、あまり建築雑誌を賑わせることがなかった。それは20世紀末期の、スイスを代表とする世界的なミニマリズム<sup>(注1)</sup>の潮流に合流し、現代建築の新しい状況を生み出してきた。あのカオス建築のF. ゲーリィにさえ、ブランデンブルク門前のパリ広場に建つ銀行建築に古典主義とミニマリズムのデザインを手がけさせた。

1970年代のポスト・モダン文化は多様性、複雑性、カオス性へと牽引したが、その混成系文化が頂点を迎えると、透明感のあるミニマリズムの超越的なデザイン・スタイルへと収斂していくような現象が現われ出た。煉瓦造建築の戦災の跡を敢えて見せつつ改修されたベルリンの

ノイエス・ムゼウム (D. チッパーフィールド設計) のデザインは象徴的である。新しいベルリンの平和都市像を模索しつつ、今、戦災を受けた後に爆破解体されていたバロック建築の王宮の復元工事が、イタリア人建築家のミニマリズム系のデザインと合成されて進行中である。



戦災した建物を改修したベルリンのノイエス・ムゼウム

13世紀のフリードリヒ二世の立ち位置と現代ベルリンとは大きな差異があるが、そこには多文化共生とミニマリズムが重なり合うという構造で共通するものが認められる。一段高いところから混沌を俯瞰しつつ、流れに棹ささず、ニュートラルな心境をもって社会進化の触媒役となるのである。

「広島派」と呼ばれる建築家の皆さんの建築スタイルは、今日のミニマリズムの潮流に相通じるものがあるように見える。それはポスト・モダン的な喧騒とは一線を画し、新しい倫理観を表現していたように思う。被爆百年を目途とした平岡市政のもとの「2045 ピース・アンド・クリエイティブ」は霞んでしまっているが、ベルリンのIBAのように、さらに国外の建築家を招く段階へと進んでいけば、新しい次元が築けたのではないだろうか。

(注1) ミニマリズムとは、ヘルツォーク&ド・ムーロンの建築に代表されるような、人為的なものを削ぎ取り、ミニマル(最小限)な幾何学形態を追求する傾向。

## ひろしまのまちづくりの動き

### ① 第4回 響け! 平和の鐘祈念式 (開催報告)

- ◆ 日時: 平成30年8月6日(日) 9:30~10:15 晴れ
- ◆ 場所: 中央公園・ハノーバー庭園の南広場
- ◆ 主催: 響け! 平和の鐘 実行委員会

近年にない連日の猛暑の中、市民ら150人が参加して祈念式が開催された。

黙とうの後、広島合唱同好会とコーラスピープルが「ひろしま平和の歌」「鐘よ、平和の鐘よ」を高らかに歌い上げた。最後に参加者全員が順番に、澄んだ鐘の音色を次々と響かせた。

今年の式典では次のような工夫がされていた。

- ① ゆったりと木陰で式典に参加できるように、会場の位置が青少年センター横の広場に変更された。
- ② この鐘が後世へ末永く引き継がれるように、「こどもの言葉」が盛り込まれるなど、若い世代が多く参加した。
- ③ 式典の前日、実行委員会の有志が鐘の清掃をし、長年の汚れを綺麗に洗い流した。

69年前に鐘の製作に係わった鋳物師・金子一十さん(元・金子合金所代表)の曾孫にあたる高校3年、谷口 葵さんは次のように話しています。「鐘の由来を知り、誇りを感じます。危険を顧みず、鐘を造り上げたのは『戦争のない世界をつくりたい』という願いだったと思います」(2018年8月7日付 産経新聞)

(実行委員会代表 高東博視)



鐘の清掃



子供と一緒に大合唱



参加者が鐘を打ち鳴らす

### ② ひろしま盆ダンス開催!

8月11日(土)の夕刻、旧広島市民球場跡地で「ひろしま盆ダンス」が開催され、大盛況とまでは言えないが、第1回目としてはまずまずの成功裡に終る。被爆1年後の廃墟の中、この地で行われた「戦災供養盆踊り大会」を新しいスタイルにして72年振りに復活させた。

先祖供養という元来の目的に加えて、参加者が世代や国境を越えて平和を体感する集いの場にしようということで、中国新聞社が市民団体などに呼び掛けて実行した。

ねらい通り、家族連れや観光客や外国人の姿が目立ち、国際色豊かなイベントになりそうだ。

オープンセレモニーで冒頭、原爆死没者と西日本豪雨災害で亡くなられた方々を追悼して黙祷し、主催者の中国新聞社社長が「世代や国境を越えて集い、平和の喜び、廃墟からの歩みや広島と世界とのつながりが実感できる国際交流イベントにしたい」とあいさつ。



会場は、やぐらを組んだステージを中心に盆ダンスエリア、その周囲にグルメコーナー・休憩コーナーのほかに、日本文化が体験できるブース、折り鶴が折れるスペース、ブラジル移民の歴史をたどるパネル展示などがあり、市民レベルの交流が図られていた。

盆ダンスについては、前半は各団体によるパフォーマンスを傍観する雰囲気であったが、ファイナーレの「広島音頭」の総踊りになると観客も加わり、会場は踊りの輪で一体感に包まれた。

#### (コメント)

クラウドファンディングで一般市民からの協力金を求めたが、目標の500万円には遠く及ばず。スポンサーが多いので、市民が協賛しなくても大丈夫という思いか、同じ寄付をするなら西日本豪雨災害の方を優先すべきという判断が働いたものと思う。

スポンサー頼りではなく、市民団体が核となる組織で企画・運営され、多くの市民が参加し、その収益を災害や福祉・環境などの募金活動へ還元できるようなシステムが望まれる。

### ③ 西日本豪雨災害に見舞われる！

7月5日から8日までの長雨で西日本の広範囲にわたり平成時代最悪の災害が発生。特に広島県、岡山県、愛媛県の被害が大きく、死者・行方不明者数では広島県が109名・5名（9月8日現在）と全体の半数を占めている。

被害の概要は、大雨による山からの土石流で家屋の破壊と土砂流入、川が氾濫して広範囲に浸水、川の堤防が崩れて道路・橋・鉄道の寸断、ライフラインが破損して断水・停電など。

被災した店舗・工場・農林水産関連だけでなく、交通マヒによる流通産業などの地域経済にも多大な影響を与え、被災していない観光地でも風評被害により観光客が一時激減した。

#### 被害の主な要因

・ **梅雨前線・線状降水帯** 梅雨前線が同じ場所で停滞し、積乱雲が連続して帯状に連なる線状降水帯が各地で発生。今回は長雨蓄積型豪雨とも呼ばれる。

・ **表層崩壊・コアストーン** 沢筋を中心に斜面の表土（風化した砂）が崩れ落ちる表層崩壊が多発。なかでも直径数mに達するコアストーンと呼ばれる大きな石が流れ落ちて家屋や治山ダムなどを破壊する被害が発生。中国地方の山間部に多い花崗岩からなる地盤に特徴的な災害。

・ **バックウォーター** 河川が合流する地点で本流が増水し、支流が流れにくくなったり、逆流したりする現象。行き場を失った支流の水が堤防を越えると、堤防が決壊するなどの浸水被害につながる。今回は高梁川の支流小田川沿いの倉敷市真備町が典型的な事例。

・ **異常洪水時のダム放流操作** ダムがほぼ満水になり、許容量を超えないように流入量と同程度の量を放流する操作。放流が行われると、下流で急激に水位が上昇し、浸水被害の可能性あり。今回は愛媛県の野村ダムの放流により下流で死者が出て、住民から不満の声が上がる。

#### 現在の状況と課題

被災して2か月が経ち、幹線道路や鉄道などのインフラも徐々に復旧しつつあるが、同時多発広域災害のためボランティアが不足気味で被災地の日常も未だ取り戻せていない状況。

広島県は今回の甚大な被害が生じた要因や災害対応を分析し、改善策を検証するため有識者検討会を設置し、豪雨時のダムの放流、河川の氾濫、土砂災害の3点に絞って議論し、年内に報告書をまとめる予定。また県は8月14日、災害対策本部から災害復旧・復興本部に移行し、更に出先機関に専門組織を設置（9月1日付）して砂防ダム建設や護岸改修などを加速させる。

当面するハード面の対策だけでなく、自然災害に対する国の基盤整備の最終目標を定め、それを補うソフト面の充実について国民の合意を得る努力が求められている。





## ○ 広島復興の軌跡・人物編（第12回）～竹重貞蔵県都市計画課長～Part 3 ～県職員として当初の広島市の復興計画に関わり、そこで基本的方針が確定された～ 引き続き竹重課長について記述をしよう。（以下敬称略とする）



### 全国的な展開

もう少し竹重について言及してみよう。竹重は平成9年8月5日に逝去されたが、日本都市計画学会が発行する機関誌「都市計画 210」（1997Vol. 46/No. 5）において二つの追悼文が掲載されている。一つは都市づくりパブリックデザインセンター理事長今野博の「竹重貞蔵さんを偲ぶ」であり、もう一つは都市計画コンサルタント協会専務理事吉宗一哉の「竹重貞蔵先生の業績」であった。

今野によれば「白哲で頭の切れる歯切れのいい方で、区画整理界の先達として種々ご指導を戴いたのであるが、ついに天寿を全うされた」と92歳の生涯を紹介している。

その具体的な業績の筆頭に記されているのが「広島に原爆が投下された日、故人は広島県土木部の都市計画課長として在任しておられ、被爆者の一人であるが幸いに生命に別状なく、広島市を始め県下の戦災都市の復興事業の指導をされたのである」という広島での運命的な体験と業績に触れている。恐らく広島で取り組んだ最初の復興計画体験が、その後の竹重の都市計画人生の方向性までも規定したに違いない。

昭和22年に愛知県土木部計画課長に赴任するが、そこでは名古屋市の壮大な復興計画事業が待っていたはずであり、名古屋市技監（後に助役）であった田淵寿郎と協力して進めたに違いない。とはいえ、名古屋の復興は田淵の功績として有名であり、ややその陰に隠れているが、一宮市、岡崎市の戦災復興事業では県の竹重の貢献が大といえる。

### 住宅公団、住宅・都市整備公団における貢献

昭和30年に日本住宅公団が設立されたが、その時、初代の宅地部長に就任した。今野によれば、竹重は「住宅公団の衛星都市開発は質のいいものにすべきだと、道路は出来るだけ下水管を入れ、舗装率を上げる、等」の方針を提唱したという。「区画整理事業に理解の薄い公団の理事諸公を向こうに回して、懸命に説得された姿が脳裏から消えない」とも回想されている。またその後、都市計画学会の事務局長に就任して学会組織を社団法人にした功績が大きいのだそうである。

もう一つの追悼文を書いた吉宗一哉によれば、「日本住宅公団は公団法の第1条に『宅地の大規模な供給と、健全な市街地に造成するため土地区画整理事業を行う』と定められており、この業務の責任者として竹重先生が選ばれた」としている。さらに「業務の執行に必要な規定、基準の制定が竹重先生を頂点に進められ、今日の住宅・都市整備公団の都市開発事業の基盤が作られたのである」と、昭和56年に発足した新たな公団への改組を説明している。

### 竹重の先駆的読みを現代で展開できないか

本Part 3があまりに広島と無縁の内容になっていると思われるかも知れないがそうではない。愛知県庁時代からの竹重を師と仰ぐ吉宗は、「なかでも土地の先買を行い、施工者公団と地主公団の利点を利用し事業の効率化をはかられたのは有名である。すべてについて精緻なお考えに職員は感心したものである」といい、竹重の先を読んだ組織運営にまで評価が及んでいる。

住宅公団といえば住宅を建設して供給・管理していた組織のように考えられるが、住宅だけでなく宅地の整備に尽力していたということである。さらにその後、住宅・都市整備公団において、都市基盤を展開したことになる。そういった時代を竹重は支えていたのである。



7月の大豪雨で山際付近に流出してきた土砂・流木等で破壊された家屋

過去の栄光については、必ずしも的確に評価しようとしているといえず、現在はその実績を継承するような公団の活動はみられない。しかし、時代が移れば新たな課題が噴出しているはずである。従来の体制のままで推移するだけでなく、現在の新たな課題に対して、それぞれの分野でしっかりと未来を見据えて取り組む人材の輩出が望まれる。



今回の災害で著しく処理困難なコア・ストーン群、早急な対策が必要

戦災復興事業を初め、基町再開発事業や西部開発事業、そして段原再開発事業をやり遂げ、あるいは西風新都事業をほぼやり遂げ、大規模開発時代は一定の役割を終えたようである。戦後広島復興事業を主導して後に全国的な展開をした竹重を見るにつけ、4年前の2014大規模土砂災害を経験した広島の技術陣が多くを学び、国土保全の旗手として大きく成長していてもよいのではないかと。

以上、竹重の軌跡を辿った結果の、締めくくりとしたい。(編集委員 石丸紀興)

## □ ほっとコーナー

### 「呼吸」日常でできるリラックス

お母さん Webライター 素直 環

まずはじめに今年7月の西日本豪雨災害により被災された皆さまに心よりお見舞い申し上げます。

私は今春、家族で神奈川県より広島県江田島市へ移住してきました。移住後あっという間に時間が過ぎたというのが率直な感想ですが、今回の豪雨でわが家も一時避難所に駆け込みました。幸い自宅は浸水もなく無事で、江田島市全体が断水したほかは電気とガスも使えました。しかし水が出ないというだけでかなりのストレスを感じます。ご飯を炊くにもトイレにもお風呂にも洗濯にも。いかにたくさんの水を毎日使っていたのかとありがたみを痛感しました。

人は当たり前(ではないけれど普段そう感じていること)のことができなくなるとストレスを感じます。頭では理解していても、感情の部分で処理できないことも多いのではないのでしょうか。私は移住による環境の変化で知らず知らずのうちにストレスが溜まっており、そんな時あるアドバイスをいただきました。それは「呼吸」です。

人はストレスがかかると、自然と呼吸が浅くなります。不安なとき、嫌なことがあったとき、お天気の悪い日にも浅くなりがちです。反対に楽しいことがあったとき、リラックスしているときなどは自然と呼吸が深くなります。その助言をいただいてから、都度呼吸を意識して生活するようになりました。

あの豪雨の日も避難所に行くかどうか迷っていた時、夫に「深呼吸！」と指摘してもらい焦る気持ちが落ち着きました。緊急事態の時こそ、深く呼吸をと意識するだけでいくらか冷静になれます。何も使わなくても自分の心と身体を落ち着ける方法として「呼吸」はとても有効だと実感しました。

やり方はまず「吐く」こと。「吸う」動作を先にしてしまうと、過呼吸になりやすいそうです。深く息を吐ききってから、吸う。それを繰り返すだけでも違います。

また、息を吐ききったあとに、  
4 秒間、鼻からゆっくり息を吸う。  
7 秒間、息を止める。  
8 秒間、口からゆっくり息を吐く。  
という方法もあります。



大きく吸い酸素をたくさん取り入れ、呼吸を止めて取り入れた酸素を血流に循環させることができるそうです。ほっとひと息つきたい時、焦った心を落ち着けたい時などに試してみてください。

参考記事：[https://www.lifehacker.jp/2015/02/150218sleep\\_instantly.html](https://www.lifehacker.jp/2015/02/150218sleep_instantly.html)

## ○ 映画鑑賞：ジェイン・ジェイコブズ —ニューヨーク都市計画革命—

「少し退屈なところもあるが、都市計画に携わっているものなら見ておくべきかも・・・」とのメールを受け取り、横川シネマに足を運ぶ。未知の人であったが、アメリカの都市思想家ジェイン・ジェイコブスのことを少し知ることができたので紹介したい。

### ☆ イン트로ダクション（リーフレットより抜粋）

NYのダウントウンに住む主婦、ジェイコブズが書いた「アメリカ大都市の死と生」（1961年出版）は、近代都市計画への痛烈な批判と全く新しい都市論を展開し、世界に大きな衝撃を与えた。

当時の主流は、アメリカンモダニズムを背景にしたゾーニングと自動車中心の都市計画だが、街が次々と活力を失い、未来の廃墟となっていく。暮らす者の視点で観察し、魅力的な街を作るための独創的なアイデアを練り上げたジェイコブズは、「マスタービルダー」の異名を持つNY都市開発の帝王ロバート・モーゼスが推し進める開発プロジェクトを阻止するため、仲間たちと壮絶な闘いを繰り広げていく。本作は、都市は誰がつくり、誰のためにあるのか？私たちが暮らす街の未来を照らす建築ドキュメンタリーである。



### ☆ ストーリー（リーフレットより抜粋）

#### 1 ニューヨーク都市の衰退と再生

20世紀初頭、超高層ビルが次々と誕生し、NYは希望に満ちた世界最大の都市となった。しかし、世界を大恐慌が襲い、1930年代のNYではスラム化や衛生問題など市民の生活環境は悪化した。

モーゼスら進歩主義者たちは、スラムを一掃し、根本からやり直すことで街を改善しようとした。一方、グリニッジ・ビレッジに暮らすジェイコブズは、街に息づく人々の生活の中に都市再生のヒントを感じ取っていた。

#### 2 アメリカにおけるモダニズム

第二次世界大戦が終わると、モダニズムという理想を求める都市計画家が大勢現れた。彼らは上から目線でスラムや交通渋滞を把握し、地域を取り壊して団地を建て、歩道を無くして高速道路を作った。多くの近隣住民は立ち退きを余儀なくされていた。

#### 3 ジェイン・ジェイコブズという衝撃

そこに彼女が「都市の再生ではなく都市の破壊だ」と疑問を投げかけた。

#### ジェイコブズの街を元気にする4大原則

1. 街路は幅が狭く曲がっていて、各ブロックが小さいこと
2. 再開発しても、古い建物をできるだけ残すこと（家賃が安ければ、若い学生や芸術家も住むことができる）
3. 各地区には必ず二つ以上の働きを持たせること（多様な人が多様な目的で、様々な時間に訪れる）
4. 各地区の人口密度が十分高いこと

#### 4 都市を巡る闘い

ワシントンスクエア公園を貫通させる道路計画や彼女が住むビレッジがスラム地域に指定された都市再生計画などに仲間たちと抗議活動を始め、計画を撤回させた。彼女の活動は、市民が行政や権力と闘うことができることを証明した。

権力への反感が高まりつつあったアメリカでは、住みよい街を作ろうとする活動の他にも、環境活動や公民権活動などが一斉に生まれていた時代でもあった。

#### 5 ジェイコブズ、その可能性の中心

都市を考える上で行政と住民は永遠に対立関係だ。住民たちは近隣やコミュニティが持つ創造性や懸念や発想を役立て、自分たちの方法でやると行政に訴えるべきだ。与えられた知恵を疑い、自分の目を信じることが、ジェイコブズが示した都市を見つめるまなざしである。

### \*コメント\*

1970年代、アメリカで巨大団地の公営住宅が住民の生活に適していないと評価され、次々とダイナマイトで破壊されるシーンは衝撃的だ。そして最後に、今の中国で画一的な高層住宅が林立する映像が流される。人類は歴史に学ぶことができないのであろうか？

編集委員 瀧口信二



## ○ 広島市中央公園を考える⑥ 旧市民球場跡地の整備イメージ (広島市平成22年)

これまで過去に中央公園のあり方について提案された内容を整理し、分析している。今回は、33号で紹介した「旧市民球場跡地利用の方向性について」(平成18年5月、広島市民球場跡地利用検討会議)を基に、民間事業者募集提案から選考された2件の優秀案を取り入れた「跡地利用計画」(平成21年1月)及び「にぎわいづくり研究会」の成果とともに公表した「旧市民球場跡地の整備イメージ図」(平成22年6月)について紹介する。

### 旧市民球場跡地整備の概要と新たなにぎわいづくりに向けて

前秋葉市長時代、旧球場跡地の活用策について平成17年度から手順を踏みながら検討を進め、平成22年に「跡地利用計画」に基づき作成した球場跡地の整備イメージ図とにぎわいづくり方策を公表。平成25年春の完成を目指すスケジュール案まで示したが、平成23年の市長交代で水泡に帰す。前号で紹介した「球場跡地の空間づくりのイメージ」(27年)とほぼ同タイプ。

#### < I > 跡地利用計画

##### (1) 基本的な考え方

旧球場跡地は、広島市民が未来に向かって平和を実感し、広島の夢と希望を共有する場として、子どもからお年寄りまで多くの人々が集い、憩い、楽しみ、夢を感じることのできる空間づくりを進める。

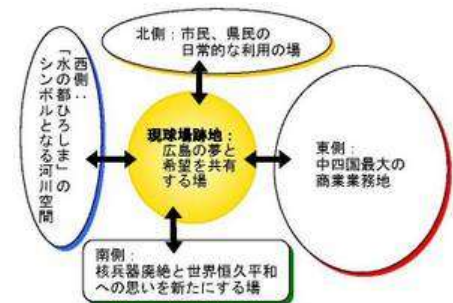
**ア 平和記念公園や河川空間とのつながりを考慮した空間づくり** 原爆死没者慰霊碑から原爆ドームを見通したときの軸線を考慮した空間づくり

**イ 都市的な賑わいを創出し、多様な人々が交流できる空間づくり** 中央公園の各施設の利用者をはじめ多様な世代が集い、交流でき、様々なイベントに対応できる広場を中央部分に整備

**ウ 未来への「広島市民球場」の歴史の継承** 戦後の復興と栄光ある広島東洋カープの歴史とともに、51年の長きにわたり親しまれてきた広島市民球場の歴史を未来に継承していくため、施設の一部を保存活用

##### (2) 利用計画の特徴

- ・概ね1万人が集客可能な「市民広場」を整備し、広場の周辺に、照葉樹などからなる「市民の森」を整備
  - ・民間事業者提案からの優秀案「折り鶴ホール(仮称)」と「森のパビリオン」(レストハウス機能)を整備
  - ・外野ライト側スタンドの一部を保存し、イベント等の観客席として有効活用
  - ・商工会議所ビルを球場跡地内に移転し、現在の商工会議所ビル敷地は中央公園として整備
  - ・現在の映像文化ライブラリー、青少年センター、広島国際アニメーションフェスティバルなど、広島らしい新たな文化情報の発信機能及び気軽に舞台芸術に関わることができる劇場機能を整備
  - ・観光バスの駐車可能台数が不足しているため、新たに観光バス駐車場を整備するとともに現在の広島市民球場東駐輪場の移設・拡充
- \*平成27年の案との違いは、折り鶴ホール、球場メモリアル、商工会議所ビルの有無であるが、全体のゾーニングは似通っている。



イメージパース



整備計画平面図

## ＜Ⅱ＞ 新たなにぎわいづくり

平成22年2月に市が設置した「にぎわいづくり研究会」は、旧市民球場跡地を中心とした新たなにぎわいづくりについて、「この公園は、いつでも劇場～都心の楽しみ空間は市民が創る～」をとりまとめ、次の基本的な考え方を示す。

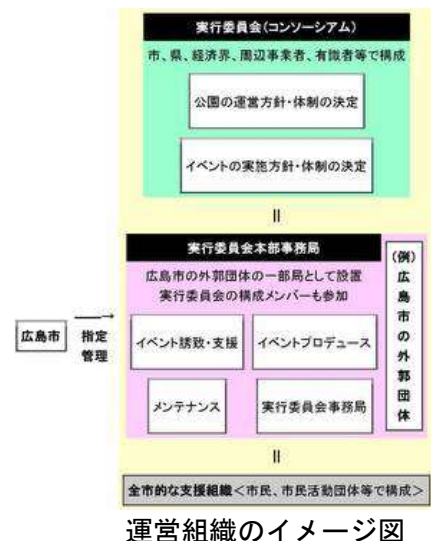
- ・中央公園一帯を一大イベントゾーンとする。そのために必要な基盤整備や組織づくりについて、行政は積極的にバックアップする。
- ・「イベント特区」的発想で規制を緩和し、イベントが実行しやすい仕組みを整える。災害時の緊急避難場所としてのインフラ整備を兼ねる。
- ・年間を通した多様なイベントを内外から誘致し、自ら企画し、実行に移すために、官民一体となった従来にない運営組織を立ち上げる。

### (1) 中央公園全体を活用したにぎわいの創出

- ・旧市民球場跡地を中心にファミリープールや芝生広場につながる中央公園一帯を一大イベントゾーンとし、様々なニーズ、イベントに対応するため、性格の異なる7つのゾーンを設定する。
- ・各ゾーンでのイベントについて市民、事業者にアイデアを求め、年間を通して多様なイベントを内外から誘致、企画し、中央公園全体のにぎわいを創り出していく。また、ファミリープールや芝生広場など中央公園の各施設や基町環境護岸を活用したにぎわいづくりについて検討する。
- ・周辺の商業施設とも連動しながら新たな回遊を生み出し、都心部全体のにぎわいにつなげていく。

### (2) 新たな運営手法や運営組織の検討

- ・にぎわいの創出を目的とする新たな公園施設と位置付け、柔軟な管理運営を可能とする施設管理条例を制定するなど、よりイベントが実施しやすい運営手法について検討する。
- ・継続的にイベントを実施していくため、イベントの誘致やプロデュースを担う新たなにぎわいづくりの中核となる運営組織の設置について検討する。運営組織の検討にあたっては、利用者間の利用調整や緑地広場の維持管理などの業務も一体的に担い、より効率的・効果的な運営が可能となるよう、指定管理制度や広島市外郭団体の活用も含め、幅広く検討する。



運営組織のイメージ図

### ＜コメント＞

- ・この提案の基本的な問題は、民間事業者からの提案募集の流れを汲み、選考された優秀案2件のいいところ取りをしようとした点にある。2社の優秀案にはそれぞれのコンセプトがあるにもかかわらず、第3者（広島市）が調整して中途端な案に収める。特に、折り鶴ホールに対する批判が多く、「若者の賑わいの場」にしようという新市長の登場で振出しに戻る。
- ・市民からの要望により残した外野ライト側スタンドも有効利用されることなく邪魔者扱い。商工会議所移転問題も進展することなく以前のまま。
- ・にぎわいづくり研究会が提案したジャズフェスティバル、ビアガーデン、朝市などの大小さまざまなイベントアイデアやイベントが実施しやすい運営方法など、検討に値する貴重な提案であるが、生かされていない。
- ・商工会議所ビルをこのエリア内に移転させる案は妥協の産物であろう。現在地に残すより良いかもしれないが、中央公園内にある必然性はない。もっと公共性の高い施設を優先すべきである。
- ・この提案と5年後の提案を比較するとほとんど前進していないことに気づく。どちらも市の組織内でコンサルを使って検討した程度なので、アイデアの飛躍が見られない。いつまでもサッカー場の候補地の一つとして留保することなく、市民広場をメインにした利用計画を決定し、前に進める時期が来ていると思う。

(編集委員 瀧口信二)

(参考資料)「旧市民球場跡地整備の概要と新たなにぎわいづくりに向けて」:

<http://www.city.hiroshima.lg.jp/www/contents/1288567798338/index.html>



## ○ 読者からの投稿

### 『基町中層アパート建て替え方針』に物申す

ダブルスネットワーク(株)代表 若本修治

8月1日の中国新聞に『基町中層アパート建て替え方針』というタイトルで、広島市が活性化策を基町地区の住民や各種団体に提示したことが記事になっていた。今回の素案では、現在17棟ある4～5階建ての中層アパートを建て替え、隣接する県営基町住宅跡地の一部を活用して、新たな高層棟を建設することも視野に入れているという。

この活性化策が浮上したのは、市内中心部でのサッカースタジアムの建設候補地として再浮上した『中央公園自由・芝生広場』案に対して、地元住民が建設の反対を表明したことが要因なのは間違いない。新たな地域活性化案を地元住民に示すことで、サッカー競技場建設の機運を高めようと考えたのかも知れないが、唐突で場当たりの方針転換の記事を読んで驚いている。

基町地区は、すでに県営アパートは役割を終え建物の解体が始まっており、市営アパートの中層棟も老朽化して、広島市の『市営住宅マネジメント計画～推進プラン編～』にも第17アパートを除いて建て替え計画はない。比較的新しい基町高層アパートも1987年竣工で、すでに築後40年を経過している。市営住宅の入居基準は収入の上限が決められており、結果的に“低所得者層”を集めた街になっている。だから高齢化率が高く、独居老人や外国籍の人たちも多い。都心の好立地にも関わらず、想定地価に見合った土地の活用が出来ておらず、経済活動、雇用の創出、税収の増加、都心の活性化にも期待される立地が、特定の「賃借人」たちによって本来の土地の価値が損なわれている。

戦後から現在までは、原爆により家族や家を失ってスラム化した街の復興で、旧広島市内にあった公有地を高密度に利用し、所得の低い市民に住居を供給することは、社会的な意義もあり、広島市民の理解も得られただろう。しかしその後の高度経済成長と政令指定都市に伴う周辺市町の広島市への編入、都市のスプロール化などによって、基町地区の立地条件は大きく変化し、公営住宅のあり方も変わってきた。建物建設による土地利用が50年程度固定化してしまうことを考えても、基町地区の土地利用に関しては、すでに市営アパートの役割は終えたと考えていいのではないだろうか？新たな都心の土地利用によって広島市全体の活性化を考えた再開発計画が求められていると思う。

また、公営住宅のあり方も大きく変わってきた。戦後の住宅不足や失業対策、経済発展の起爆剤や土地利用促進の呼び水として、戦後の公営住宅の供給が果たした役割は大きい。しかし税金を投入して個人向けの賃貸ビルを建設、建物の維持管理費用まで永遠に負担し続ける時代はすでに終わっている。しかも一定収入以下の人たちしか入居できないため、努力して賃金を増やした人たちは退去を求められ、行政が“貧困層を集めた街”をつくるのに税金を投入し、結果的に貧困の再生産・低所得者の社会からの隔離となっているのが現在の状態だ。

海外では低所得者対策は、民間が開発する一定規模の住宅地に「社会住宅」として全住戸の2割程度に低所得者向けの住宅を供給することを条件として、開発許可や家賃補助を行っているという。所得によって人を隔てたりせず、賃金が上昇すれば補助率を変えることで社会復帰を促し、地域に住む人たちの多様性が生まれ、税金の投入もわずかだ。しかも公有地であれば、街並み景観もコンペ等で比較でき、立地や地価負担に応じた土地利用も可能になるから、固定資産税等の税収も増えて市民にとっても誇らしい街に誘導していくことも可能だ。

私が8年前に視察したドイツ南西部の環境都市フライブルク市のヴォーバン住宅地は、戦勝国フランスに接収されていたNATO軍基地から払い下げを受けた公有地だったが、市の長期計画に基づき未来を先取りした住宅地に誘導する街づくりが、今も市民の誇りの街として世界中から観光客を集めている。しかも建設の多くはコーポラティブ方式で建てられ、地元の雇用創出とコミュニティ形成にも大きく寄与している。そんな街づくりを広島市でも望みたい。

## □ 編集後記

西日本豪雨災害、台風 21 号による風雨災害、さらに北海道胆振東部地震により被災された皆様にお見舞いを申し上げます。

最近の自然現象の変化をみると、私たちに何か大きな変化が押し寄せているのではないかと思います。これまで我々を取り巻く自然・社会環境は、時間の流れに沿って連続しており、目立った変化は無いように感じてきました。しかし、太古から何度もとてつもない変化に遭遇したことが知られています。

わが街もいつの間にか病んで、行き先を見失い、さまよいつけているのではないか、「誰かがなんとかやってくれている」、「行政に任せておけば大丈夫」といった依存した市民の集まりとなり、決定されたことに無関心で、それでもって自分達のこととなると不満や要求を言う。これでは、市民としての尊厳を失うこととなります。

かつてのまちづくりを願う先達の復興のエネルギーに触れる時、これからの大きな変化を予想し、まちづくりの目標を定め、その実現に向けての議論を始めなければならないと考えるのは、私達だけであろうか？

(編集委員 前岡智之)

### ○お知らせ：「時代を語り建築を語る会(第22回)」開催

- ・語り人：川島宏治氏(ちゅピCOMひろしま プラス 1 担当)
- ・テーマ：逆インタビュー — 川島宏治さんに聞く広島における人材 —
  - ・開催日：2018年9月26日(水) 18:45~20:45
  - ・会場：合人社ウエンディひと・まちプラザ 研修室C(北棟5階)  
(旧広島市まちづくり市民交流プラザ)
  - ・会費：1000円(資料費・会場費)、学生・院生は無料
  - ・参加申込：広島諸事・地域再生研究所  
電話/FAX：082-223-7226 メール：[nisimar5@hotmail.com](mailto:nisimar5@hotmail.com)
  - ・主催：時代を語り建築を語る会実行委員会(代表 石丸紀興)

**\*メルマガを読まれたの感想や質問及びひろしまのまちづくりについて  
皆さんの自由な提案・意見をお聞かせください!**

(投稿は500字程度でお願いします)

#### 編集委員

石丸紀興	広島諸事・地域再生研究所主宰
高東博視	心豊かな家庭環境をつくる広島21理事
瀧口信二	広島アイデアコンペ実行委員会事務局
通谷 章	ガリバープロダクツ代表
前岡智之	中国セントラルコンサルタント代表